

夕刊 新報 日八十月一

心理學の泣言

戸川行男
その精神機構の根本を
理解せしめる能があるか
らである。吾々も實際的
的コマ切的研究を行ふ
充分にアカデミックであ
る。併しそれは生きた人
間を、眼だけ又は耳だけ
の人間でない本當の人間
を知るための手段として
ある。その目的を捨て
ては出来ぬ。

黄金魔刀

講談
(53) 再桑義生作
龍口俊也書
(五) 徳田中
その翌の夜、東左衛門の
一行は佐賀島の城下に泊
つた。
箕部錦蔵は東左衛門と二
人になると
「われ、を付けてゐる者
が、あつたよ」
と聲をひそめた
「お、さうではないか
と思つてゐる。編笠をかぶ
つた立派な侍だらう」
「何者だらう? 何のため
にわれ、をつけるのであ
らう?」
「気がつきませんか、先夜
の城の首領神徳次郎です
『あつ、彼奴だ』
東左衛門は何處か見たこ
とがありさうな服装恰好と
思つてゐたが、さうだ、陰
陽師の従者として入り込
んでゐた、賊の首領に違ひ
ない。かれは身内が寒くな
つてゐるやうに、



松川村泉短歌會に出席す

清水 延 晴
時刻すぎに着きたるバスを下りた。遠より
見つけ合せる友
挨拶を交す幾人は知る知らぬ『泉』短歌を祝ぐ
と來し人
○氣づかひし片空曇り時雨れて來てゐるさし初
めし柳はぬれたる
○充ち足らぬ評につけ添ふ言葉尻とがれるふと
省みにつけ

陰徳あれば 陽報あり

中外商業新報社
福富恒樹
といつたもの、ところが
その家庭には娘さんにな
るといふ返事、結局その
勞は無駄だつたのである
事實はそれが無駄だつた
うか。現にその家庭は既
に二度買物をした家庭だ
つてゐる時、親切に教へ

その星の輝きは
箱入り娘の瞳の色に似合
はしい。
19日 △幕府遣米使節の成
臨先浦賀を出帆(安
政七) △ワット生
(一、七三六) △泉村出身
の臺南高工教授志賀孝平
氏在中列車内で自殺を
遂ぐ(昭和一〇)
20日 △原原時亡ぶ(正
治二) △ラスキンの
産没收法撤廃(明治三三)
21日 △下草球戦に日東の佐藤
君優勝(昭和一〇)

た。いつかの夜、目の前に
つぎつぎと白刃の光が
浮んだ、右手をつかまれて
おれは殺されるかも知は
れないと思つた、あの時の
恐怖が肉體を刺した。
『彼等が肉體を刺した。今
度は何をするつもりだらう』
『あの男がいつてゐるから
は、仲間が當然かくれて見
張つてゐるに違ひないの
で、かくれてゐるに違ひな
い。』
『彼等が何の類になりま
すか。』
『彼等が何の類になりま
すか。』
『彼等が何の類になりま
すか。』

鯉魚節 干やなぎ 卸小賣 大角園 實家・静岡産地・茶問屋 七周年記念 大特賣中

耳鼻咽喉科 高柳醫院 新春家庭の必需品 大特價大賣出し 尼子自動車商會

以前の最悪地録田

一轉して優良部落に

平町の納税組合發達傾向

自後にならぬ納税... 納税組合の發達傾向...

漁獲約六十萬圓

昨年の成績から観て

將來を期待される四倉港... 昨年の成績から観て...

來るべき總選舉に

民政部會で一名公認

民政黨石城支部會は十七日... 來るべき總選舉に...

ガソリン 停留場設置

廿一日の運輸協議に

地方民望の湯... ガソリン停留場設置...

太陽無き家庭へ

僅か乍ら餅を恵む

平町助成會では昨朝の如く... 太陽無き家庭へ...

石川省線バス

植田町長から請願... 石川省線バス...

高月學園の今昔

警中同志會交歓また聴記

和近省吾氏、醫學博士八木... 高月學園の今昔...

好問川の堰堤本工事

昨午十一月二十七日の大霖雨... 好問川の堰堤本工事...

人夫醉餘の奇禍

肋骨三枚を折る

トランプに飛び乗らんと... 人夫醉餘の奇禍...

本郡は「泥棒の巢窟」

平署の統計に現れた

昨年中の犯罪色々... 本郡は「泥棒の巢窟」...

老婆を傷く

不埒オートバイ... 老婆を傷く...

船中に集喰ふ賊

料理屋荒しに求刑二年半... 船中に集喰ふ賊...

暴れ貨物

老婆を轢き殺す... 暴れ貨物...

應齋草庵を訪ふ

日本畫漫談 II 添風... 應齋草庵を訪ふ...

天氣 豫報... 二十三日午前九時...

本報 敬告... 植田町長...

ゲーム取 至急入用... 詳細面談...

平町助成會... 本年掉尾の大奉仕!!!

福引景品付大賣出し... 放送局認定高級ラヂオ...

常磐電機商工組合員... 賦月月ケ五...

舊十二月二十日、二十八日、... 新年末特價大賣出し...

舊十一月十四日、二十一日... 本年掉尾の大奉仕!!!

特價品の一部... 金紗小紋...

三井吳服店... 贈るに便利...

電話 三八二八番